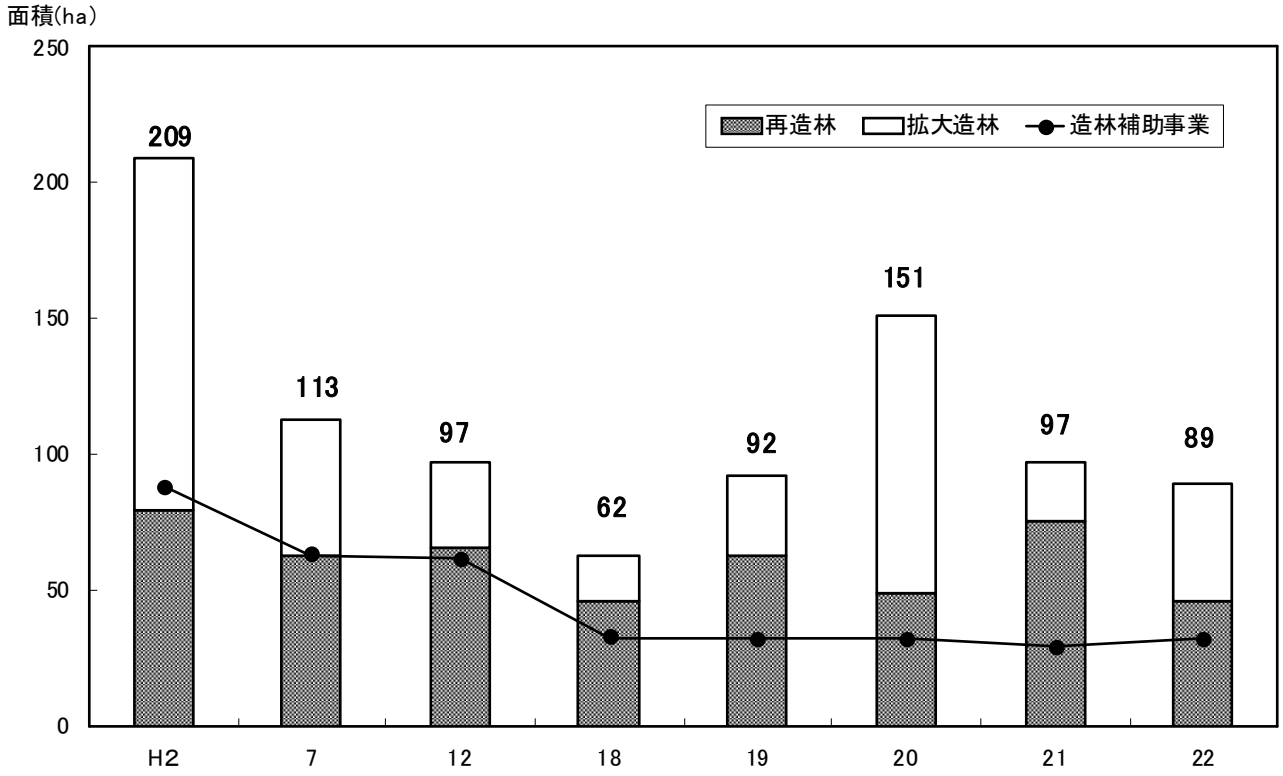
２．森林の整備

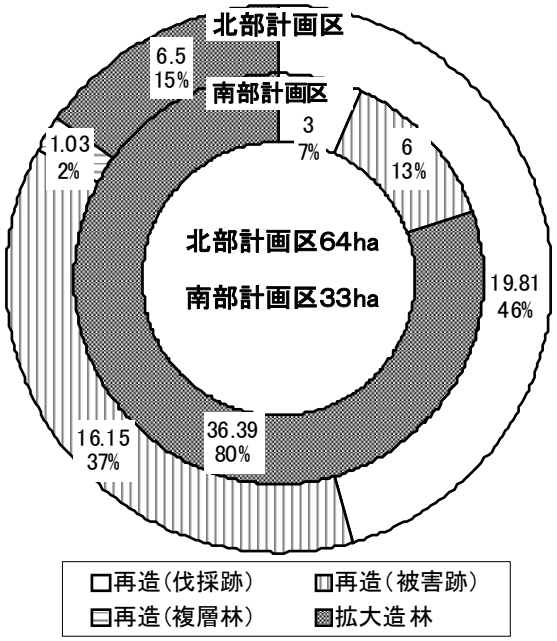
(1) 人工造林

―造林面積が減少―

造林種別人工造林面積



地域別人工造林面積



本県の造林面積は平成20年度に大きな増加を見せたが、その後減少の傾向にあり、22年度の造林面積は90haであった。

この内、補助造林面積は32haであり、前年度より3ha増加し、人工造林面積に占める割合は、36％となっている。

造林種別内訳は、再造林が前年度より28ha減少して47ha、拡大造林が21ha増加して43haとなっている。

22年度実績を地域森林計画区別に見ると、北部計画区が前年度より20ha減少して44haとなり、その内訳は、再造林が37haと84％を占めた。

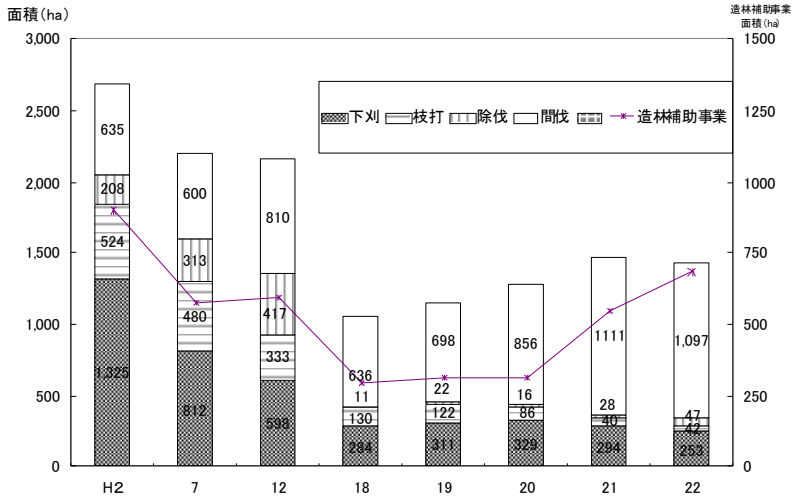
一方、南部計画区は前年度より13ha増加して46haとなり、内訳は、拡大造林が36haと78％を占めた。

また、造林樹種別の面積構成は、スギが39％(35ha)、ヒノキ28％(25ha)、マツ23％(21ha)、広葉樹１０％（９ha）となり、前年度に比べヒノキ、マツの割合が増加し、広葉樹の割合が減少した。

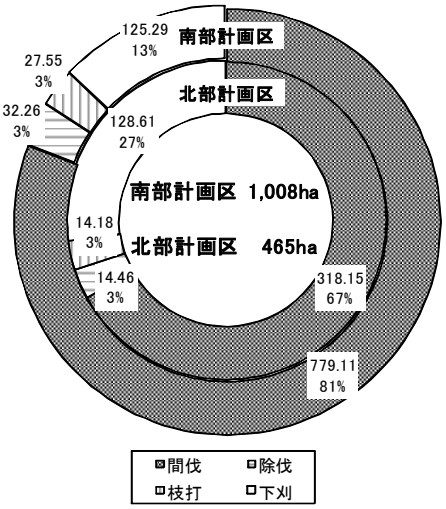
(2) 間伐・保育

—間伐・保育実施面積は横ばい—

間伐・保育面積の推移

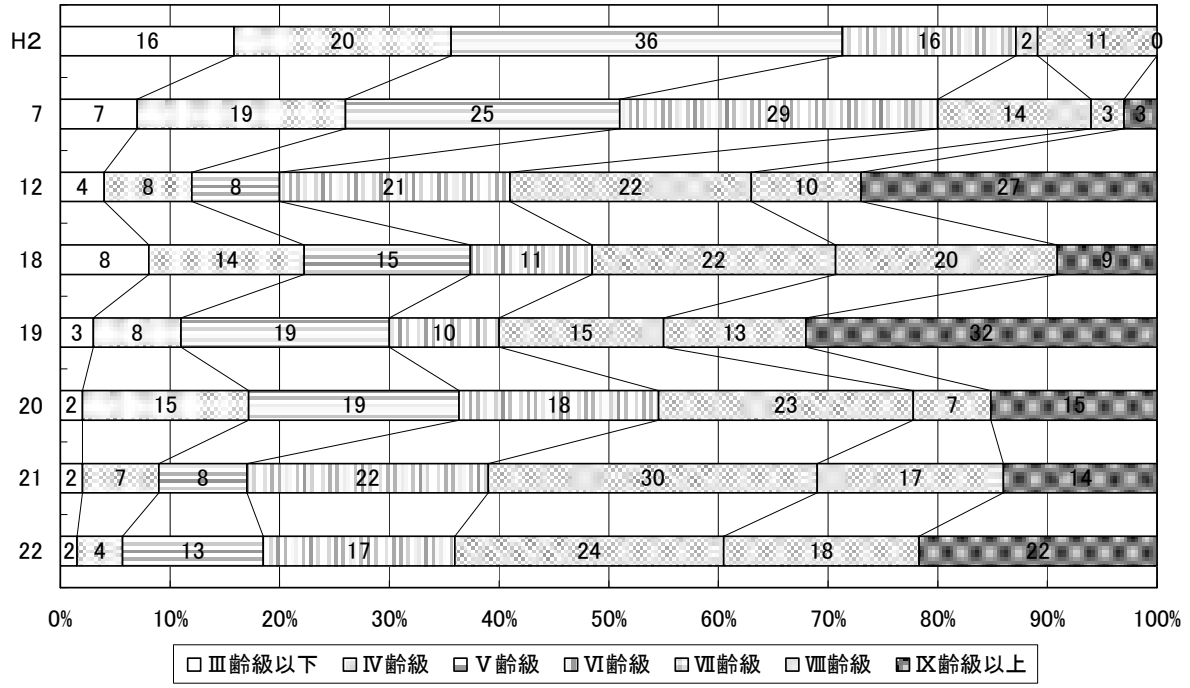


地域別間伐・保育面積



間伐の齢級構成の推移

単位:%



本県の間伐及び保育の実施面積は、16年度より、1，000ha～1，300ha程度で推移していたが、22年度は1，440haと前年度から33haの減少となった。

種類別には、除・間伐及び枝打は昨年度とほぼ同等の面積であったが、下刈が昨年度から40ha減少して254haとなり、これに伴い保育面積全体も減少することとなった。

22年度の地域別傾向としては、南部計画区964ha、北部計画区475haと南部計画区に集中した傾向となっており、その種類別内訳は、北部計画区が下刈13%、間伐81%に対して、南部計画区では下刈27%、間伐67%となっている。

間伐実施面積構成を齢級別にみると、22年度はⅦ齢級以上の割合が64%を占め、さらにⅧ齢級及びⅨ齢級以上の割合も前年度に比べ増加しており、間伐全体として高齢級化が進んでいる。